

廓然無聖 かくねんむしやう

くカラリと際もなく、聖という影もないく

平成三十年九月二十六日 加茂法話会

一、從容録 しやうようろく

宏智正覚(一〇九一―一一五七)が紹興年間に古徳の妙則百則を編集し、その一つ一つに頌古 じゆこ (本則の解釈の仕方の要点を漢詩で端的に表現していくもの) をした『宏智頌古』が成立した。のちに万松行秀が嘉定十六年(一二二三)、五十八歳の時、北京の報恩寺の從容庵に隠居していた折、元の太祖の遠征にしたがつて西域に行つた弟子の湛然居士・耶律楚材の拝請によつて、この『宏智頌古』に示衆・著語・評唱を加えたものを著し、從容庵の名を書名にいたたく『從容録』が成立した。

從容録の第二則が「達磨廓然之話」だるまかくねん

二、【本則】

挙す。梁の武帝、達磨大師に問う、如何なるか是れ聖諦第一義 しやうたいだいいちぎ。

磨云く、廓然無聖。かくねんむしやう

帝云く、朕に対する者は誰そ。ちん

磨云く、不識。ふしき

帝契わず。かな

遂に江を渡り少林に至つて、面壁九年。めんぺき

頌有り、頌は開口の口頭に分付す。じゆあ かいく こうとう ぶんぷ

【大意】

達磨がインドから渡来し、梁の武帝と初めて相見した時の問答とされている。武帝が第一義諦(最上の仏教の理)とは、何かと問うたのに対して、達磨は、仏法とは凡聖を超越し、一切の相對を絶したもので、どれが尊くてどれが尊くないなどというものはない、と答えた。帝はその答へに納得せず、尊い理も何もないならば、それを伝えるために私の前におまえは一体誰なのか、と問うた。達磨は知らないと答えたが、これは第一義諦が思慮分別をこえたものであるということを重ねて強調したものである。

三、【頌】

天童の覺和尚頌に云く、

廓然無聖、來機徑庭。

得は鼻を犯すに非ずして斤を揮い、失は頭を回らさずして甑を墮す。

寥寥として少林に冷坐し、黙黙として正令を前提す。

秋、清うして、月、霜輪を転じ、河、淡うして、斗、夜柄を垂る。

繩繩として、衣鉢、児孫に付す。

此れ従り人天、薬病と成る。

獅子吼、不尽。

【大意】

駒澤大学名誉教授 石井修道記

カラリと際もなく、聖という影もない

達磨は武帝にスパリとつきつけた

鼻先を犯さんばかりに斤をふるったのではなかつた

甑を墮として割れてしまつては、とんとふりむきもしなかつた

ひっそり少林寺で壁に向かつて坐禅をし

黙つたままで釈迦の教えをまるだしにする

ちようど秋の空は澄み切つて、月冴えわたり

天の川はうつつらと、北斗七星は柄杓を画くように

達磨はこれが釈迦よりずっと伝わつたあかしの品だと子孫に授く

おかげで禅者は、薬のいる病氣となつた

四、昨日九月二十五日が、トキの自然放鳥から、丁度一〇周年。

十羽の放鳥から、現在は三百五十羽に。

平成七年にトキ保護センターをたずねた折、近辻参事さんの言葉

「人間もトキもそのままで尊い命を生きているのです。」

近辻さんはその後、センター長にもなられ、自然放鳥の翌年。六七歳で亡くなられた。

五、価値があるから、生きるのではない。生きているから価値がるのである。

渡辺和子著「置かれた場所で咲きなさい」から

六、薬病とは、薬によつて病を治しおわつても、薬の毒によつて生ずる病をいう。仏道は凡夫迷妄を直すための薬であつて、迷妄を除いて悟りの境に達しても、この境に執著していれば、それがまた一つの病となるということ。

宗教は、執著・こだわりを離れること。